

# 赤江地域の文化遺産 (赤江地域自治区管内)

## 【地域の歴史と特色】

赤江地域は、東は太平洋に面し、南北を大淀川・清武川の両河川に挟まれた地域で、東部には広大な沖積平野が広がり、西部には宮崎層群で形成された標高30~40mの丘陵が連なっています。

現在の北方・南方・郡司分付近は、古代から中世にかけて、八条女院領国富庄の「国富本郷」に由来し、「本郷」と称されました。また、大淀川河口右岸には中世以来の湊として「赤江湊」があり、当地域の交易の拠点として発展しました。

近世には、恒久村・田吉村・北方村・南方村・郡司村・福島村に分かれ、延岡藩領となった福島村を除く5ヶ村は飢肥藩領となりました。恒久村の枝村であった城ヶ崎町は中世末に開かれた町で、「赤江湊」に隣接していたことから、近世を通じて交易の拠点として栄えました。

## 【文化遺産マップ】



## 城ヶ崎地区

じょうがさき

### ① 城ヶ崎

城ヶ崎は、天文20年（1551）に良港であった大淀川河口の赤江湊に太田七郎左衛門という人物が開いたのが始まりとされています。また、地名の由来は、西にある伊東四十八城の一つ曾井城の前（さき）であることに由来すると言われていま

す。近世には、城ヶ崎は大淀川上・中流域からの物産の集積地となり、上方との交易で商人の町として発展しました。太田家、南村家、小村家などの豪商の店が並び、商人たちが別当や老名などの町役を勤めました。文久2年（1862）には、商人が藩に願いでて独自に銀札の発行を行うなど、商人による自治も認められました。

また、豊かな大きな経済力を持つようになった城ヶ崎では、商人たちを中心に俳諧などの庶民文化が栄えました。



在りし日の城ヶ崎の様子

じょうがさきはいじんぼひならびにいたびぐん

### 📷 城ヶ崎俳人墓碑並びに板碑群（市史跡）

城ヶ崎俳壇の発端は、行脚俳人安楽坊春波が、城ヶ崎の豪商である小村西雪（後に日高姓）らを指導し、元文3年（1738）に「俳諧秘伝書」を与えたのがはじまりとされています。その後、京都から来た百井塘雨の指導を受けるなどして、太田可笛、小村五明、南村梅雨らの俳人を輩出しました。

城ヶ崎の俳人たちは、郷土で句会を開いて精進するばかりでなく、町人たちの間で俳諧・文事を盛り立てるなど、その功績は大きく町人文化の発展に寄与しました。

可笛や五明、梅雨など、一時代の町人文化を築いた俳人たちの墓碑は、現在も城ヶ崎の一角にあり、墓碑には句が刻まれているものもあります。また、同じ敷地内には嘉歴3年（1328）銘のものをはじめ、古式の板碑も数基残されています。



やさかじんじゃ

### ② 八坂神社

八坂神社の創建については詳しくわかりませんが、天保12年（1841）6月5日の神社修築の棟木が残されていることから、それ以前の創建と考えられます。

城ヶ崎が隆盛の時代は、祇園神社と称し、別名牛頭天王八坂神社とも呼ばれて崇敬されていました。明治3年（1870）に夜句茂神社と改称し、社殿の改築を行っていますが、当時恒久神社に合せられ、後に復社となって八坂神社と改称して現在に至っています。



## 恒久・田吉地区

あかえちょうこふん

### ③ 赤江町古墳（県史跡）

恒久小学校の南側、少し小高い丘が赤江町古墳で、墳丘の高さ4.7m、径43mの円墳を目にすることができます。昭和8年（1933）の県史跡指定時には3基の古墳がありましたが、現在確認できるのはこの円墳1基のみとなっています。『日向地誌』には「福長院塚」とありますが、かつては側に霧島小祠が祀ってあったため、別名霧島塚とも呼ばれています。

江戸時代に盗掘を受け、剣や鎌、鎧などが出土したと伝えられ、墳丘には石室に使われていたと思われる石材が散乱しています。

昭和50年の区画整理事業により公園として整備され、敷地内には室町から江戸時代にかけての石仏・石塔が置かれています。石仏群の中には、串間円立院による文政3年（1820）作の弘法大師像も含まれています。



ほうせんじのにおうそう

### ④ 宝泉寺の仁王像

城ヶ崎俳人墓碑並びに板碑群のすぐ西に、真言宗宝泉寺があります。宝泉寺の山門前には、江戸時代に造られた仁王像、阿吽一對が安置されています。

銘には、寛政元年（1789）に延岡藩領古城村（現宮崎市古城）出身の仏師串間円立院により、地元住民が願主となって国家安全、武運長久、火難回避、五穀豊穰を祈願して建立されたことが記されています。

円立院が残した仏像は現在362体が確認できますが、これらに残された銘から宝泉寺の仁王像は、円立院が最も精力的に活動し、大型の仏像彫像をした頃の作であると考えられています。



づんぷりとうでんせつ

### ⑤ ツンプリ島伝説

大字田吉、一ツ葉大橋南詰の大淀川と八重川に挟まれるあたりに「ヅンプリ」という地名が残っています。江戸時代初期のこの辺りは島で、ヅンプリ島と呼ばれていました。ヅンプリとは宮崎の方言で水を被るという意味です。

かつて、このヅンプリ島には、10万両が隠されているという伝説がありました。この伝説は、いつ頃からどのように発祥したのか定かではありませんが、吉村町の清水家に伝わる系図が、この伝説の発端ではないかと考えられています。

昭和31年（1956）の日向日新聞の記事によると、この10万両は宮崎城の隠し財宝とも考えられ、真偽のほどはわかりませんが、宮崎に残るロマンを求めた伝説だといえるでしょう。



## そいじょうあと ⑥ 曾井城跡

城ヶ崎の西側、現在野崎病院のある山が曾井城跡です。

『城郭大系』によれば、南側に「本丸」、北側に一段低い「二の丸」があり、発掘調査によって柱穴、土杭等が検出されています。

曾井城は、伊東氏支族の曾井氏によって築かれたとされていますが、曾井氏が伊東氏に背いて島津氏に応じたため、文安元年（1444）に伊東祐堯が城を攻め、領有することとなりました。その後、伊東四十八城の一つに数えられ、城主は八代民部左衛門と伝えられています。伊東氏没落後は、島津氏の家臣、比志島式部大輔義知が入り、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州仕置きによって伊東祐兵の領地となります。元和元年（1615）の一国一城令で青島の紫波洲崎城などとともに廃城となりました。

また、曾井城跡にはかつて古墳があったとされ、中国の貨幣である「貨泉」が出土しています。



## しょうはちまんじんじゃのろくじそうとう ⑦ 正八幡神社の六地藏塔幢

曾井城跡の北、諏訪池横の正八幡神社に、加納バイパスの工事に伴って近くから移された六地藏幢2基があります。

この内、永正18年（1521）銘の六地藏幢には「曾井城」と記され、『日向ノ金石文』の編者も、『日向地誌』に曾井城の西麓にあったと記される「瑞雲寺」のものではないかと推定しています。



## つねひさじんじゃ ⑧ 恒久神社

恒久神社は、寛治4年（1090）11月15日の創建で、五社大明神を祀る都万宮から勧請され、一ノ宮大明神と称したと伝えられます。

コノハナサクヤヒメの他に4柱の神様が祀られます。

代々、領主領民の崇敬が厚く、社領三百石の寄進があり、社殿の修理、再興造営については、創建以来、文化11年（1814）までの724年間の間に15回にも及んでいます。

明治4年（1871）に村社となった際に恒久神社と改称し、家内安全・子宝・安産・五穀豊穰・厄払いの神様として地元住民から信仰されています。

また、恒久神社には恒久神社夏越の唄という民俗芸能が伝承されています。神社の夏行事として、若者が神輿を担ぎ、赤江浜で海水に浸かって禊払いをする浜下りという行事があり、この時に唄われるのが夏越の唄になります。



民俗芸能 恒久神社夏越の唄

まついようすい  
⑨ 松井用水

江戸時代初期、飢肥藩領清武郷のうち東北方・西北方・上南方・下南方・上恒久・中恒久・田吉・岩切の8村は水の乏しい土地柄のため干ばつに苦しむことが多くありました。

このような干ばつから農民を救おうと考えた飢肥藩士の松井五郎兵衛儀長は、満潮時に大淀川が逆流するのを見て清武川の方が水位が高いことに気付き、清武川から水を引くことを考えました。当時としては大事業であったこの事業は、寛永16年（1639）12月に普請にとりかかり、19年間の工事で全長は10 kmにも及びました。この事業によって、農民たちは干ばつから救われただけでなく、新開田を促すものとなりました。

驚くべきは、この事業に着工した時の松井は70歳で、日向国における江戸時代初期の先駆的な開発事業として、この功績は大きく称えられました。

松井用水は、赤江中学校前の用水路など今でもその形を残しています。また、宮崎南警察署の裏手にある稲荷山公園には、松井五郎兵衛を祀った松井神社があります。

松井翁疏水碑



まつざきじ  
⑩ 松崎寺

松崎寺は山号を鶴林山といい、寺伝によれば百済の官人日羅の開基と伝えられ、日向七堂伽藍の一つに数えられています。曹洞宗の寺院として飢肥長持寺の末寺に位置付けられ、釈迦如来・観世音菩薩を本尊としています。江戸時代には飢肥藩から禄高五石五斗が給せられるなど伊東家の庇護を受けました。

松崎寺は明治4年（1871）の廃仏毀釈により廃寺となりましたが、明治32年（1899）に曹洞宗帝釈寺の末寺として復寺され現在に至っています。

松崎寺の山門には、飢肥領清武郷今江村（現宮崎市木崎今江）出身の仏師平賀快然作の仁王像が安置されています。

また、境内の墓地には霞流剣士年見与一左衛門の墓があります。与一左衛門は大変な武芸者と伝えられ、威圧で飛んでいたカラス3羽を落としたりという伝説が残されています。



かまたしんしろ  
⑪ 鎌田新四郎の墓

松崎の年見家にある「霞之流弟子供養碑」に名前が記されている霞流の高弟、鎌田新四郎の墓が、赤江公民館横の柳籠墓地にあります。

墓碑銘には「霞流師匠、徳翁明功居士、鎌田新四郎、元文三戊午年正月廿一日、弟子二百三十一人」とあり、鎌田新四郎も多く弟子を抱えていたことが分かります。



## 本郷・郡司分地区

たちとじんじゃ

### ⑫ 田元神社

空港の西、県道中村木崎線沿いにあります。  
田元神社由緒によると、寛治4年(1090)5月、都万神社の祭神を、神託により恒久に分祀するにあたり、まず仮殿を本郷南方に建造したもので、本殿(恒久神社)造営後も田元宮として残ったものです。

境内裏には、大永8年(1528)銘の六地藏幢や串間円立院作の十一面観音立像があります。



かごじんじゃ

### ⑬ 加護神社

大字郡司分、国富小学校の正門脇にあり、伊東祐邑などを祭神としています。

祐邑は伊東祐堯の二男で、兄祐国とともに飢肥攻めで戦功がありましたが、祐堯・祐国の没後の文明18年(1486)、甥の尹祐の手の者によって日向の日知屋城において殺害されました。

祐邑の死後、伊東家では様々な祟りが起こるようになり、祐邑の霊を鎮めるため、天文5年(1536)に建てられたのが加護神社(加護八幡宮)です。

また、国富小学校の敷地の一角には、曾我兄弟を祀ると伝わる五輪塔があります。



ちょうしょうじ

### ⑭ 長昌寺の板碑

長昌寺は大字郡司分にあり、山号を繁林山と称する真宗本願寺派の寺院で、境内に鎌倉時代の板碑残欠2基があります。

一つは、紀年不詳ではありますが、造立は鎌倉時代後期とみられ、碑文には「瑜祇経」の一部を薬研彫りにしています。もう一つには、元亨3年(1323)の紀年銘があり、死者の霊魂をあらわす「幽霊」という文字が使われています。いずれも、市内に遺された数少ない鎌倉時代の板碑として貴重であり、歴史、宗教史、文化史の面からも重要な資料といえます。

